

三郷小倉から槍ヶ岳を目指す

飛州新道と中田又重

かつて、安曇野と飛騨高山をつないでいた飛州新道。この道から、槍ヶ岳への道が開かれました。その歴史を守り、現在に伝えようと活動している中田信一郎さんにその歴史を聞きました。

開拓の歴史 大滝山を越え飛騨へ

拾 ケ堰の完成を契機に県内でも有数の米どころになった安曇野。

その頃、松本と飛騨高山を最短距離で結び、安曇野の米を輸出し、代わりに海産物を輸入しようとする飛州新道が構想されました。当時、松本と高山を結ぶ道は、野麦峠越えのルート（140km）と安房峠越えのルート（102km）の2つで、どちらも100kmを越えていました。

それに比べ三郷小倉から大滝山を越え、上高地を通り高山に至る飛州新道は、なんと42・6kmと約半分の距離。拾ヶ堰が完成した1816年の4年後の1820年に着工し、1835年に完成しました。この年から1861年に閉鎖されるまで安曇野と高山の交易を支え続けました。



中田 信一郎さん (47)

新道開削に協力したのが、私の5代前の先祖にあたる中田又重をはじめとした三郷小倉に住んでいた人たちでした。又重は、開削工事の現場を担う中心的な存在でした。また、当時は木材の切り出し場と考えられていた上高地を町として考え、農作物の栽培を行っていました。

播隆との出会い 槍ヶ岳へ

飛州新道開削開始から6年後の1826年に槍ヶ岳開山を決意し、

とともにおれを兼ね飛騨に入ったとみられます。実際、同年の6月17日に飛騨側の工事許可が下り、8月20日に通行許可が下りています。

まもなく槍ヶ岳開山から200年

4年後の2028年は槍ヶ岳開山200周年となります。それに向けて「槍ヶ岳開山の里安曇野」という企画を立ち上げ、歴史の発信などの活動を始めました。山に関わる皆さんなどに協力いただきながら、これからの安曇野と北アルプスを次世代へつないでいく一つの方法になるような槍ヶ岳開山200周年になればと願っています。

安曇野市山岳サポーターズ



X (旧 Twitter) で北アルプスや里山、観光情報などを発信。山岳観光をサポートしています。

又重と播隆が眺めた大滝山からの槍ヶ岳



大天井岳近くの切通岩に埋め込まれた喜作レリーフ (小川大系作)



百瀬玄三松 提供：中房温泉

槍を目指すもう1つのルート 北アルプス表銀座ルート整備の歴史

今 日の登山ブームの始まりは大正時代に遡ります。1916年に信濃鉄道（現在の大糸線）の松本―大町間が開通したことにより、北アルプスへの関心が高まりました。北アルプス南部で登山道や山小屋の整備が次々と進められたのもこの頃でした。

そして、今では北アルプスの表銀座として広く親しまれている縦走路（大天井岳―東鎌尾根―槍ヶ岳）が拓かれたのも同じ時期でした。これにより、槍ヶ岳へ縦走するには3～4日かかっていた行程が2～3日に短縮できるようになりました。また、学校集団登山もこの頃に始まり北アルプスと人

との距離が近くなりました。

この縦走路周辺の登山環境整備は、最近の研究により百瀬玄三松（中房温泉6代目経営者）・彦一郎（同7代目経営者）親子の構想であったことが分かってきています。

2人は国の許可を受け、槍ヶ岳付近で狩猟などを行い土地勘に優れていた山案内人の小林喜作（穂高牧出身）らにこの表銀座ルートなどの新道開削を依頼し開発を進めました。また、同様に槍ヶ岳直下に殺生小屋を建設しました。

現在、私たちの心を引きつけてやまない北アルプスの登山環境は、先人たちが築き上げてきた歴史から成り立っています。

Report 大滝山を愛する人々の会 播隆と又重の歩いた登山道を整備

北アルプスパノラマ銀座の1番南にそびえる大滝山。播隆上人と中田又重が槍ヶ岳を目指した登山道を毎年整備しているのが、市民団体「大滝山を愛する人々の会」の皆さん。本年は7月18日・19日に整備を行いました。

大鎌でクマザサを伐採しながら道幅を広げ、倒木があればチェーンソーで切り倒す。ぬかるみがあればその場で調達できる材を使って橋を架け、道標を補修。これらの作業を冷沢登山口から鍋冠山を経由して大滝山荘までの約7.8kmにわたり実施しました。

道中のいたるところでかつての飛州新道と思わせる痕跡が残り、静寂に包まれた尾根道は、知る人ぞ知るトレッキングコース。「マイナーな登山道だけど、この山に登る人が安全であるように」と、作業に励む皆さんの顔には大粒の汗が輝いていました。



生い茂るクマザサを大鎌で伐採



作業終わりに山頂で



道標の補修